
月 刊

MéLange

Vol.108



2015.11.29

詩と評論

月刊「Mélanges」

Vol.108 2015.11.29

「月刊めらんじゅ」編集部

詩 & 俳句

連想ゲーム 8……………野口 裕 03

杖譚……………大西隆志 04

花の息……………有時秀記 05

〈赤色ピラ〉北吹く二十句・冬薔薇、青年 十句 (俳句)……………高橋雅城 06

浮遊／小人……………中嶋康雄 07

ゴミの日……………黒田ナオ 08

物語……………岩脇リーベル豊美 09

雨の底から 樹の底から……………福田知子 12

ぼくはあなたを……………大橋愛由等 13

New Seasons 四つの季節 ③……………中堂けいこ 14

涙……………月村 香 16

かたしろ……………富 哲世 17

都市草紙 2 ここじゃない空へ……………木澤 豊 18

連載エッセイ & 詩評

ひと言詩評〈11〉……………富 哲世 10

神戸詞あしび97「そこには茫洋としてかつ有情の沃野あり」……………大橋愛由等 20

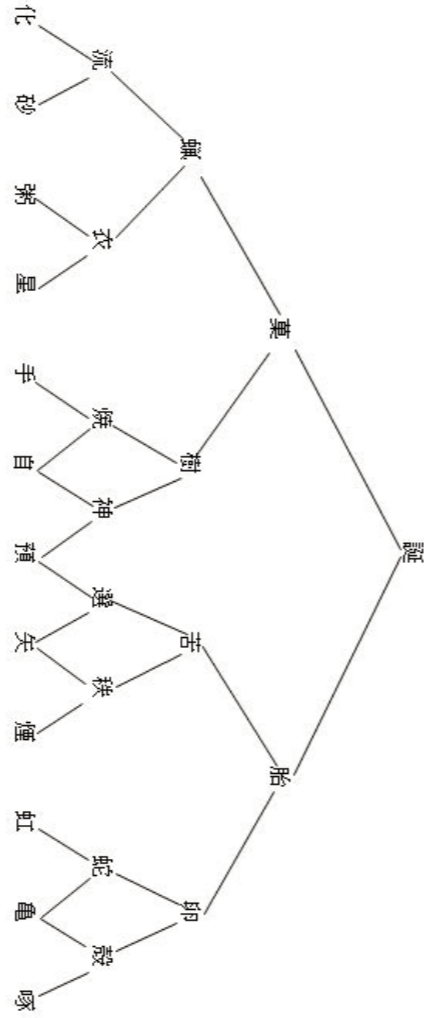
お知らせ

2016年3月21日／姫路美術館／『画家の詩、詩人の絵』展のシンポジウム……………15

編集部だより★29／11月も下旬となってようやく寒くなってきた。紅葉を見る余裕もなく年末を迎えようとしている。第108回目の「Melange」月例会は、第一部の読書会に、詩人で文芸評論家の山田兼二氏を迎えて、谷川俊太郎の詩世界について語ってもらうことになった。テーマは「谷川俊太郎とジャズ—詩の前衛性と即興性をめぐって」。山田氏は明快な論理とするどい分析力で、詩評論の世界で卓越した存在です。さまざまな詩のジャンルに対して目配りもできている人でもある。／11月は詩の会「カフェ・エクリ」で「ヨブ—義しき人の苦悩」、「大阪教区沖縄交流・連帯委員会」のみなさんの前で「奄美のキリスト教」について発表。下調べはそれぞれ労力を要したが、ふたつの発表ともども知的キャリアの蓄積になったかと思っている。〈大橋記〉

◆ 連想ゲーム 8

野口 裕



流れ星海をぐるぬき海の裏

鶏を漬して、操嫌を取りながら

空腹で胃を働つけるよりまじしと

十分なもてなしもできないが

八卦を立てる

ひたすら笹竹をこね

気の利いた一言でもそのうち出てくれればと

大した助言ができるわけでもないが

相づら打たずに手を抜けば傷付くだろう

おそろしく持て余したとらをさしに來たはずだ

とりとめなく纏ぐ

と書いてつ招き入れた卒の語は

誰だよこの夜中に來たのは

◆杖譚

大西隆志

杖であります
身体を支える杖です
わたくしは皇国の杖として
北支から南洋に移送された杖でしたが
今は朽ち果てた木片です
弱った精神に忍び込む
杖としての言葉は
一億の慈愛により一人でないことを
教えてくれます、砂に水がしみ込むように
杖はたくさんあります、一本折れてもかまいません
棒は杖になり
傷病兵の跛行を助けます

手に持たされた投擲弾は杖でした
壕から飛び出すさいには白旗を巻きつけ、沈黙を
死ぬまで生きる上での杖はどなたでしたか

神輿を担ぐ若衆の先頭に杖が立上り
寄り添う先へと音を響かせる
猿田彦さんに杖を曳かし
右足を支え、左足を支えては、頸を屠られ
杖は一步先の地面をけるのです

杖は時間をこえていくこともあります
川を掻き混ぜて、曳航する午後を閉じ込める
節々が痛むのですが
消え入る焚火にあたり
冷え切った感傷をなだめています

川の曲がりに意味があるように
一本の杖になることの難しさ
砂を刺し、蛙を刺し、雑草を薙ぎ払い
杖に仕込まれた善良なる人に
悪意が宿ろうとする、ことを通過させる歩行よ

◆花の息

有時秀記

まぶたに涙がにじむのは
この世の果ての幽かへと
人影乗せた笹舟が
行つて帰らないからなのか
やがては消える花の息
いまは紅い落葉を踏みしめて
名残の月をながめるのは
たゆたう時を愛惜するためか

彼方を想う丸窓を
かの城に登り透かしみる
遠望すれば白雨のなか
飛び濡れる鳥一羽

濡れ羽の鳥に託されたひと枝は
しずくを垂らして地表に落ちる
崩れた枝から散らばる種が飛び散り
永遠回帰の鐘がなる

丸窓を見る眼差しは
とうの昔に閉じているが
いやさらに閉じていながら開いている
かくも自由な往還に、花と鳥、
種と丸窓の狂詩曲ラングザムがなり続く

◆赤色ビラ

高橋雅城

北吹く 二十句

立冬やトルソに留守をまかせきて
明日はくる明日はくるはず暦果つ
峠には峠のおきて冬山家
赤色のビラ切れ切れや北吹いて
幼児の人身市場冬麗
味の素なめてくらくら十二月
マネキンのほだ短日に青ざめて
入水には寒オリオンは遠すぎる
名も知らぬヌードグラビア冬ざるる
町々に雪降らしめよ子守歌

あのとときは小雪今日の死は床に
われおもうおもいコンダラ関東煮
テント劇開演まだか虎落笛
紅い魚あばれて浮いて盲鍋
鯛焼は上手く割れない嫁もらう
プロレタリアートの怒号鯨が来る
大枯野われに似しもの過ぐるかな
午すぎてコントラバスの冬日向
ジャケッツは新宿ゴールデン街へ
マンモスの髭に開きぬ六花

冬薔薇未成年には早すぎる
未成年筆りて白き冬薔薇
セロファン冬の薔薇が未成年
セロファンの冬薔薇萎え未成年
未成年その身を斬って冬薔薇
未成年摺めぬ冬の薔薇かな
冬薔薇散らすのままの未成年
冬薔薇咲くとも未成年の元
未成年叫びとどかず冬薔薇
冬薔薇未成年なら先ほかに

冬薔薇、青年 十句

◆浮遊

中嶋康雄

静かな川面に顔を出す
牛のような鳴き声だ
鳥のような肉感だ
だんだん体が溶けている
鳴き声と顔面が崩れ合う
水面に落ち藻掻く蛾の
散り放たれた鱗粉みたいに
浮かぶ油脂が進化している
つまらないものがまた出来る
プラスチックの細粒みたいに
始末が悪いつまらないもの
蚊の卵を繰り返し裏返す
つまらないものが
つまらないものと群れてゆく
吐瀉物の暗闇
つぶれかけた居酒屋の
つぶれかけた酒の肴の

◆小人

中嶋康雄

むず痒さ
ひっくり返り続ける蚊の卵に
嘲笑われる人の影
蹲るその影の主が
くそつたれの朝をまた踏みにしる
薄ぼけた月
みだらな川面に
しぼんだ風船みたいな死体が浮かぶ
下からなにかがつつくので
うす暗いダンスを続ける
小人の女が綾取りをしている
隣で草を食べるバツタの体は
小人の女より倍ほど大きい
杖をついた大きな存在がやって
来る
咳をしている

不機嫌な唾が店から降り注ぐ
小人の女の頭の一部が溶けている
溶けた場所から煙が出ている
煙を吸ったそれはへらへら笑う
それから咳をしながら
大きな陰茎をズルズル出して
小人の女に小便をかける
小人の女が逃げると
小便が追いかける
逃げて逃げても
小便が追いつく
柿が今年が少ないので
小人の女は腹を空かせている
浮き出た肋骨の隙間を小便が伝う
綾取りの毛糸が小便を飲んで
昔の傷が膿み始める
小人の女の足は膨れあがる
紫色になった思い足が
ポロリととれる
小人の女は歌う
歌に会わせて
新しい足が舞い出てくる
新しい足には水かきが付いており
小人の女は小便の池で
泥鰌を捕まえる
串に刺す

火である
小人の男に食べさせる
小人の男は巢でピーピー鳴いている
泥鰌は小人の男の腹の中で
毛糸にもどる
腹の中で綾取りが始まる
綾取りがとられるたびに
小人の男の腸が巻き込まれ
綾取りは複雑になる
数学は追いつかない
ベクトルが虚界を放浪する
小人の男はやせ細る
腹だけ膨れる
女は男を不味そうにバリバリ食べる
顔を齧めてバリバリ食べる
嘔吐しながらバリバリ食べる
草を食べるバツタの体が
緑から茶色に変わり
動かなくなる
小人の女が赤子を産む
赤子の臍の緒を切りながら
小人の女は歌う
バツタの腹に赤子を寝かせ
狩りに出かける

◆ゴミの日

黒田ナオ

雨降りの夜
燃えないゴミと一緒に
ビニール袋に詰め込んで捨てたはず
なのに朝になつてずりずりと這い出してきて
こっそり通り過ぎようとした私の
後ろから追いかけてくる

だんだん重くなる背中と
生臭いにおいとうんざりしながら
通勤電車に乗って

結局無理やり詰め込まれているのは
私もおんなじなんじゃないかと頬つぺたを
ぎゅつと押しつけられた電車のドアの

向こうに見える青空がやたら眩しい

あれ あれあれ
首を傾げる

と廃棄物処理場の
くすんだ緑の屋根の上から
猫の形をした雲が
おーんおーんと呼んでいる

でも

ゴミ捨て場から這い出してきたものたちが
首筋にこびりついているから

飛べない

私はまだ 飛べない

落とした視線が

並べられた線路の上で

もうすぐ

干からびる

◆物語

岩脇リーベル豊美

君がのちに創作しようとしている絵画はメドゥーサ
錯誤して絡まる蛇髪と見開いた眼と
見るものをすべて石にする能力

君は免税のチョコレートを買ってきたり
湧水を汲んできてくれたりするけれど
夜半に明日の憤りが瞳を寝つかせない時は
わたしは石の塊になつて横になるしかない
どんな神話にもあるような石になつて

君は本人に代わつて錠剤を受け取りに行つたり
柔らかくも吸収性のあるちり紙を探してきたりするけれど
いつにない深い眠りから覚めその闇の音を聞いていると
世界は咳払いひとつのうちに豹変した気配がある

つぎに目覚めたときは

もう世界などなくなっているのではないかと思う

愛と芸術の都は戦火に包まれ

ドイツ人でも日本人でもこの状況で決して歌わないであろう
ラ・マユセイエーズを皆で合唱している

硬質性をもとに戻すには君の涙が有効だという

頭に生えている女蛇は

同性には嘯みつくことはできず男のみを狙うけれど

女は美味くないのか 信用できないのか

双方の柔らかい部位を綿密に見とけながらも

河浴みをする隙を狙つて攻めるのはより不用心な片方

子供の悪戯防止と魔除けの意味を込めてわたしは

スーツケースにメドゥーサの首を描いていた

これまでは誰にも退治できなかつた

ペルセウスは鏡のように磨き抜かれた盾を見ながら

歪んだ刀で眠るメドゥーサの首を搔つ切る

落ちたメドゥーサの首から滴る血が砂漠に

悲しみとも怒りとも区別のつかない

猛毒の生き物を生んでいた

化学変化はもう始まっている この刹那にも

〈きみ〉という場所―福間健二詩集「あと少しだけ」

みずうみ 1

なつかしい鉄道の、なつかしい駅から
なつかしいみずうみにむかって
歩きだしてしまつた
霧のなか。

進む。進まない。

同時にやろうとしているから
踊れない。枯枝と枯葉と苔に親しみ、音から
透きとおる冬の生きものになるはずの
この体でつくる

灰色の自転車に乗っているのは
きみだとしても、きみのいちばん硬い部分だ。

それでも、困らないのか。
人の世。

心をこすりつけてきた悪童たちが消えて
粗雑に、寒い迷路をたのしむしかない
スケジュールがこなされている。

それとはなんの関係もなさそうに
濃密な水をたたえている
みずうみ。濁ることを

おそれるだれを犠牲にして
どんな波と速度が

ぼくときみとのあいだに立ち上がるのか。

溺れる者の傲慢さも
謙虚さも理解しない村が

リアーナやレディー・ガガを聴いている。
待つてほしい。

幼い指に握られたばくのハンドルは
まだ炎を感じていない

みずうみ、その底にある心臓の打つ音が
たくさんの人の思いのとおつた

水の上を逃げていく。
ストーヴのないきみの部屋に

ぼくを食べてしまつた岸辺の寒さが忍びよる。

(「みずうみ」全行引用)

7 そうではあるが

いまはまどろみながら
音だけで漂う飛行機

その黒い歌が
紙の時代の最後のペコちゃんを溺れさせる。

こうして人の
入眠幻覚を踏んでいるのが

この靴はたのしいのだ

二〇一四年

この国の窪地の
線路を歩き

灰色の空と遠くの山並みを見た。
放心の

風の吹き込む廊下
人の内側から出るふりをして

この音楽は
何も守らない。

灯りのついた霧の街を
泣きながら去っていく人の前に

音で自分を見えるようにしている天使たちも
死ぬ寸前の

耳が聴く
音の傾斜で交錯する南と北も。

そうではあるが
銀色の天井の下

まだとぎれているわけじゃない
シャッターをあげる手につく色が変化して

無音のもうひとり遅刻させる
運命線

大正区

飛べない
痛い

うつる
と言っているのに

冬の光がその靴をきれいに見せている。
（詩集「あと少しだけ」より『あと少しだけ』の7）

掘り起(こざれよう)としているのは何なのか。日々の、日常の、途上の今
が、未完の今が、解読不可能がここにはある。ここには思念の丈の厚みが
広がる水のように語られようとしている、そんな書かれ方をしている詩
だ。(きみ)とは誰か?(きみ)とは、歩きだしてしまつた(ぼく)が取り
零し続けて来た時間が、今を跨ぎ、(きみ)と呼ばれた少年の自画像となつ
て自分を追いつけて行く姿だろうか、あるいは行きずりにふと目が選んで
しまつた他者だろうか、それとも(ぼく)においてもつと伴走者の誰か
だろうか。このような(きみ)と呼ばれる者すべてとの隔てられた親
密さの距離を、懸命に測ろうとしている、ように見える。ぼくはぼくの鏡
の顔の外側にある、(きみ)を見だし、捕まえ、歩行のうちに奪わなくて
はならないが、それは同時に、(濁ることを)おそれるだれかを犠牲にし
て(立ち上がる)ほかない、ぼくときみとの関係を問うことでもあった。
ここでの(きみ)は他者と私とで成る世界を開くための合言葉であり、(ぼ
く)が訪ねるみずうみとはその水をあらゆる他者としての他者性がくぐる
(世上)というたましいの溜まり場、として定位できるのかもしれない。
『死を与える』のアブラハムの苦悩をめぐる論考のなかでJ・デリダ
は、『他の者を犠牲にすることなくもう一方の者に応えることはできず、こ
の犠牲を決して正当化することはできない』と語つたが、福間健二は多義
性のなかに住むきみと、ぼくとの二者関係がそれが成り立つ折に犠牲にし
ている他者(その他者、みずうみの水に融け込む濁りとして、「濁ることを
おそれるだれ」かとは、レヴィナスの言う、「あなた」の顔が見つめてい
るあいだも、『無限』はつねに『第三者』すなわち『彼』としてどまつて
いる)その他者にほかならない、(ぼく)や(きみ)、(ぼくときみ)が当
事者であるための生贄として謂わば無に捧げられた(彼、彼ら)をも、わ
たしたちがそれであるために負う、破れ目のように指示している。

詩の圈い込みから社会へのことばの自然流出は世界的に既に著しい。
巷の詩の遍在は生きている「しまつている」ことの救われ方、救われのなさの
有り様と一(身)同体である。その遍在の在り方の掬い取り、詩の取り戻
しが、福間健二の表現による現実へのコミットとなつていっているのでないだ
ろうか。

あと少しだけ、「生きること」。音楽が内側から湧くように現れてくる
すれば、それを移入として感性的深みや豊かさとして、わたしたちの営み
を支える未知の出会いとして表出しようとすることは、ある意味常套手段
である。けれども福間の視線はそうではない。はるかに現象学的であると
さえいえる。

まるで人の内側から溢れ出て来るように受け取られている(そ
れ)は何かを守つてくれるというわけではない。悲しみと怒りに現れる鏡
像のような天使の姿も、いままさに死んでゆきつつあるわたしたちがさぐ
る方位もそれは守つてくれない。わたしたちは誰でも何らかの意味で人生
の生き難さを感じているが、生きることの生き難さを、慰めはデウスエク
スマキーナのように救つてくれない。わたしたちはどこかで、自身を守
つてくれない道具としての慰めの機械の部品と化しながら、人生の享乐的
な生き易さと生き難さを同時に生きているのかもしれない。

そうではある、そうではあるが
この(きみ)ではあるが(きみ)が2014年という日付のある福間の現在の境
位を表している。守つてくれない、とわたしたちがそれへと傾いていく蔓
延る通念の自己否定を示しておいて、さらにそれを、そうではあるけれど
もと否定する、その二重否定が、福間の現実認識のへこたれない強度であ
る。

けれども、福間健二の歩行の見ているものは困難に開かれた単純な希
望の偽造ではない、わたしたちは常に自分のなかに、(わたし)という自身
とその現実が遅れてくるしかないもうひとりの沈黙の別人を、かかえん
でしまつているというのだ。それが自身の過去や未来の、鏡像であるのか、
ドッペルゲンガーとしての他者であるのか、見知らぬ者かは分からない
が、それがやつて来るありのままの現実を、わたしたちのフリやつつも
りを射る冬の光が冷たく美しく照らし掛けるように、見据えている。

(2015年6月 思潮社)

◆雨の底から 樹の底から

福田知子

とわかる

樹木は遠い
もう歩き始めている
もう忘れ始めている

雨の底で見る夢は いつも
昨日の寂しい音が漂っている
寄り添い合うお互いの樹木から離れるように “ぎ”と
呼んでみる ただの眩ぎ 独り言ち 朝だから
みぎわの夢もきつとこんな夢だと 誰に言えようか
樹の洞から這い出る虫たちに口籠る

次の角を曲がった床屋さんの陰にひとりの少女が俯いたまま
短くされすぎた刈り上げの髪をひっぱっていた
母親はそのとき貧しかったけれど
ひな人形を買うことを約束し宥めた
認知症を患った母親の古い洋服を捨てた
箱詰めにしたままのひな人形を捨てた
涙のわからない涙が “ぎ” から零れおちた

冷たい水に浸された気分はお互いのもの
電波を伝う文字 一文字ごとに苦しく濡れて光っているからそれ

◆ぼくはあなたを

大橋愛由等

まだるっこい霧のなかに
ぼくがあなたを包摂して
あなたがぼくを触媒する
雲を単複同形として見て
しゃくりあげる真似して
後髪に忍び込ませた紙片
には抒情のあれとそれが
黒真珠に似た光彩を放ち
すつかり捨てちまおうと
丸めた箴言からはたぶん
エポケーがもとめられて
シッキム紅茶のあさには
似合いの紅顔がほしくて
二〇九ページからだから
と言いつつ階段を降り
てみると待機中の微風は
神に対して異議申し立て
をいつするのかという問
い立てをするかのようで

柚子の香りがたちこめる
6号室の壁に寄り添う花
の精はあしたの朝の公園
に吹くだろう嵐に立ち向
かうための詞書を考えよ
うと屏風に描かれた巫覡
の貌を一心に見ているう
ちに部屋に漂う雲たちの
悲しみをよそおいながら
包摂してしまおうとする
邪気に気づいたときには
「血であがなうしか」と
どこかからのささやき声
におどされているようで
タブラサがこわいから
と抗弁するのが精一杯な
あなたはわたしの背中に
わたしはあなたの足裏に
やどろうとしているのだ

中堂けいこ

夏…息つぎの合間にレモンウォーターを蛇腹ストローで飲む
 秋…エディンバラ大学の鉛筆
 冬…実美の棒立ちとドップラー効果
 春…首を挿げかえる

横になりながらロングストローで瓶のみするのはけっこう技がいる、と気づいたのは何度もむせかえった後のことだった。炭酸水は口に痛くありませんか、と問う外科部長の回診は二度くらいしか顔をあわせたことがなかったのだが、ここで息継ぎをするとマスクはいりません、そんなにいわれなくてもわたしは嚔下性肺炎とは無縁なのだ。ここでは年齢も性別も人種も問われないのだ。くしゃんとくしゃみが出る。この夏の猫はずっと調子をくずしていいよかとおもわれたある夜、鼻から糸みたいなのを出し、あわててひっぱりだしてやるとそれは長い長い草の茎であった。体長より長い草がどのように鼻から奥にしまわれていたのか。

大学の購買部で記念品をさがしていたわたしは消しゴム付のB濃の鉛筆をひとつかみ、せめてプリーズをつけてください、エキユスキューズミー。(2B or not 2B) 誰かが言って笑いがとまらなかつた、ずっと頭の大きい人々の後ろを長くて細い足がもつれないように見ていた。

さも見たことがあるように話すのが上手いのは、歴史がときどき嘘をつく、という真実を知っているにちがいない。虚偽ははずれず真価ははずれる。実美卿は藤原北家の末裔で上級公家という血統正しさにおいてのみ新政府の参議として首をそろえておかなければならなかつた。なんとしても。三条実美は不快をかこつて門扉をとぎす。

その首は取替えはきかない、お内裏の姫の練り首はそのままに春には新しい十二単衣を付与いたし、親王様のお身支度はもう少し我慢していただこう。きれいにととえた衣をかため座らせた胴に、細い楊枝の先に挿げられた頭をすいと突き刺し完了です。おひい様。祖母は帯解の寺で内親王のお手みずから素麺をいただいた。

『画家の詩、詩人の絵……』

絵は詩のごとく、詩は絵のごとく……』

2016年2月13日(土)～3月27日(日)・姫路市立美術館

西日本で唯一、姫路市立美術館で開催される『画家の詩、詩人の絵』展で、関西在住の詩人・美術家・学芸員たちによる応援イベントとして、詩と絵のシンポジウムを開きます。展覧会場での作品鑑賞後に六人のパネリストによる楽しい時間を共有したいと願っています。少し寄り道したい気分で、時間と空間を飛び越えた裏通りでの自由で闊達な議論と交流を楽しみませんか。



パネリスト／京谷裕彰(詩人・批評家)／鼓直(スペイン語文学者)／時里二郎(詩人)／原田哲郎(美術家)
 高瀬晴之(姫路市立美術館)／未定(姫路文学館) 司会・大橋愛由等(詩人)

2016年3月21日(月・祝)

◎姫路市立美術館

13:00～14:30 美術館

14:40～16:40 美術館講堂

※移動

◎納屋工房にて

17:30～19:30 交流会

参加費・3,000円(鑑賞券・シンポ・交流会含む)

主催／「画家の詩、詩人の絵」姫路展シンポジウム実行委員会(事務局/エクリの会 079-447-3652 高谷和幸)

後援／姫路市教育委員会(予定)、日本現代詩人協会(予定)、(株)思潮社(予定)、播磨灘詩話会、半どんの会、姫路美術協会、姫路文連、姫路文学(予定)、姫路文学人会議(予定)、文学同人誌「播火」、

協力／姫路市立美術館、姫路文学館、姫路市文化国際交流財団(予定)

◆ 涙

月村香

はらはらと涙の粒を落とす娘に父親は負け
た母はその光景を見ていろんなことを思っ
たけれど肩が痛いわと言った流れる曲はフ
レンチで中味はロックだった女の戸を開け
ていると寒いわよと言って閉まっているは
ずの戸の方に声をやる娘はまだ泣いている
わたしたち夫婦はこのまま沼から引きずり
出したらしいものかそれでも神に御心をま
かせるかいつまでもいつまでもそう深刻に
考えようとどうしてもいつまでもになつてし
まう赤いあめをやるぞと言ってみたりあの
人が病気なのよと言ったりしてどうしよう
たもなく結局かわいい娘の万年筆と紙を奪う

◆ かたしろ

富 哲世

みなさま、こんにちは
正にぎざまれたひたい男が朝
サッシの隅に鴉の落ちる
三日ぶりに陽射しの戻った空が鬚鬚をほどく
からのベッドに
横たえられて
なにか思い出せないことを思いだそうとし
ている。
カーテンが押されて
開いているから
遠目にはただ空のなかに
仰向けに
じつと横たわっているだけだ。
ひらかなのようにひろがった
てゆびあしゆび

からだか冷たかった。
木のまがくれに
蠟燭のいつぼん灯る
犬は家を出た。
霧雨のしずくが
青白く額に降って
だんなさまは
末広の邸に
お戻りになりました。
ふん、そうかい
提灯でもぶら提げて
三日月の曲がり角でも
ぶらついているのかい。
経験である前に
それであるもの
水である前にお前であるものを
だれも名指すことはできない。
ひとり紐を巻いて遊ぶ
独楽まわしの股の下の路地で
がらんとした空の
無人駅のアナウンスが物売りのようにおお
んおおんと途切れがちに響いて

脱落した顎の
沈黙の天使が枯れた翼のかげで
鏡を磨いている。
うつそうとした静けさのはざま碧の淀みを
渡り
みなもすれすれまで垂れさがった葉叢を樹
冠めがけて実のように攀じのぼる自分を
かすかに見おぼえている。
こけた頬骨の円形広場で
赤や黄や灰色の服を着けた豆粒のこどもらが
影絵の墨粟を撒きながら
棧敷の石段を駆け降り
また戻ってくるから
暗い画廊の先で
羽根に頭をうづめて眠る青い鳥の
汚れたガ―ゼはまだうろついていないだろ
うか。
冷えたからだのぬくもりに
だれひとりひそひそ笑いながら
手をのばそうと
しないのだろうか。

◆都市草紙 2

ここじゃない空へ

木澤豊

黒い屋根の上を 音を立てて流れる人がたの雲が走って
今は止まっている見つけられなかった静脈が 停滞している
夜更け ののしる窓 まるできたないものをみるように
そうか あれは瓦礫の山脈が走っているのか

*
文字でうたう あったかくて鋭い絶えず動く日々

川縁のコンサートホールに飛び込んだこうもりの細い叫び声が
切ない
へんな帽子をかぶった魔法使いの指先が落ちて激しく風が変わ
り とつぜん ダンスがはじまる

*
うつすら唇を開き 目くらます雨で アスファルトが匂い立ち
記憶はなにも変わらぬちやいないな
かれは腰を曲げて こう言った
目を傾けなさい 和音が崩れた

*
花ある田んぼの針の草が倒れ 腕がたの
いや湾がたの楔形文字が崩れたので山の指でつなげよう 象形
未時の秋に まだいるかな電報の発信した場所へ ゆっくりの
電車で行く

*
空を飛ぶもの 東へ
あんまり重い休日の その日を
わたしは 取り返ししようがない
雀が空でおぼれている 見守る古い電柱 立ち止まれば甘い空
気が声を上げる 色が変わってきた大通りで声を上げる

*
ゆっくり膝を上げる これは信じられない虫のようで
月の表情も彫り物のようで 艶やかな皺が押し寄せ 流れに乗
れなかった者一人が去る 草が実を結んだあとで まちがいな
い あれは わたしだ

*
指がどこまでも行く 糸の道路の行き当たり
遠く 煤けた舟が揺れているその航跡のなか 林檎が手渡され
た 至上の夕日が道辺の塔に上っていく 力の魂の影であろう
か

*
ただひたすら水を飲み 道筋で痛い指を組む朝の草先 唇がひ
りひりする 八十八の夏がカーテンに揺れて 裏で薄れていく
裏とはこつち側だった 投げ手の長い腕が 見えない鍵盤を行
き来していた

*
あつ 踏み越えた 落ちていく庭の底へ
一つの灯がまるい場所をつくり 人影が棒のかたちに立ったま
ま

死んだら死んだなりですよ 一つボタンを外した男が言った
象のかたちの 雲の向こう 底なしの青じやな

*
キサワさんのも持ってききましたと書いた壁のようなものを担い
で

プラットホームに上がってきたホソミズさんが言った これか
らスグムラさんの舞台を見に行くんだという そこから見るビ
ル街の向こうは晴れ上がった空だ
短いことばでそれを伝えたら夕日で空が光った

*
闇に きたないきれいの区別なんてありませんか

*
十円切手の白い鶴が叫んだ 今朝の夜明け
フラグメンタルなジャズが窓をよぎった わたしというものは
さびしい まあ風泊まりだけだ

*
それは わたしの夢と接触する が、けっして一致しない
都市の歯形である

*
ぼくの魂は いま 居眠りをしています
という墓碑銘があり 樹木の半分が陰って葉先がざわざわ
一枚一枚の影が動いたわたしは ここじゃない方角へ くるつと
回転した

うた 神戸詞あしび

97-2015.11.29 大橋愛由等



かつて私が通っていた時代(昭和30年代後半から40年代前半)のカトリック仁川教会

わたしは父の意向もあつて姉ともども、兵庫県西宮市の私立小学校・仁川学院にかよっていた。カトリック系のミッション・スクールである。ローマに本部があるコンベンツアル聖フランシスコ修道会が運営している。神父は簡素な法衣をまとい、腰縄をつけている。昭和30年代には、対独レジスタンスを経験していたボーランド人の神父もいたりした。大学(同志社大学)がプロテスタント系だった

そこには茫洋とした かつ有情の沃野あり

一月はたてつづけに、キリスト教に関する発表を行った。まず播磨を全面に意識している詩の会「カフェ・エクリ」で「ヨブ」義しきひとの苦悩(九日(月))をテーマとした語り。つづいて「大阪教区沖繩交流・連帯委員会」のみなさんの前で「奄美のキリスト教」についてを講演したのである。

不思議なことに、近頃となつて、少年時代から大学生の頃に接したさまざまなことが、強く思い起こされ、この時期に考えたこと、読書体験をいまになって反芻するようになっている。

ので、なんとなくではあるが、両者の神に対する向かい方の違いを体得してきた。

プロテスタントの信仰は心のなかで深化していくものであり、『聖書』という仲介物はあるものの、牧師という存在は信仰の(介助者)の位置にとどまっている(あるいはとどまろうとしている)ように思う。一方のカトリックの場合は、神父が神と信者の間にあつて、強い(媒介者)としてたちはだかつていたのである。プロテスタントが心の信仰に特化しているとすれば、カトリックは信者の生活や生き方や倫理規範をまるごと身ぐるみに包摂しようとする。

今回紹介している写真は、わたしが通っていた時代の仁川教会である(現在は同じ場所にコンクリート造りの建物に建て替えられている)。木造のその教会で、毎週月曜日の第一時間目にミサの時間があつて通っていた。司祭の言われるままに、座つたり跪いたり賛美歌を歌つたり、説教を聴いたりしていた。当時の教会は木造ということもあつて、冬は寒く、子ども心に「早く終わらないか」といった印象しがなく、司祭がどんな話をしていったのかはまるで覚えていない。

つまり宗教の時間に積極的になれなかつた少年は、生徒として通っている時は、カトリックの教理を理解していったとはいえなかつた。ただ、六年間の間、一日に何度となく繰り返された十字を切る所作だけは、いまでもごく自然に身につけている。

プロテスタントは『聖書』というエクリチュールを最大限に重視しようとする傾向があり、この書物に書かれていないものは信仰の対象から除外する傾向がある。この意味でカトリックと大きな違いがあるのは、マリア信仰である。カトリック国のスペイン南部アンダルシアにいくと、ここはキリスト教ではなく、マリア教ではないかと勘違いしたくなるほど、聖母マリアは崇められている。

こうした差異を考えると、わたしの少年時代の身体なかに染み込んでいたのは、キリスト教の教理ではなく、マリア信仰をひとつとする「キリスト教物語」なのかもしれないのだ。

詩と評論

月刊「Mélange」Vol.108

神戸

2015年11月29日 通巻108号

発行所/月刊「Mélange」編集部

〒650-0012 神戸市中央区北長狭通 1-7-1 2F

編集・発行人/大橋愛由等(「Mélange」同人)

maroad66454@gmail.com

定価 600円(税込)